

特色ある学校

こころ豊かな技術者を目指して

大森学園高等学校長 畑澤 正一

はじめに

平成9年より『心豊かな技術者をめざして』というスローガンをかけ、「工業を学ぶ高校生として社会に貢献できる事」という視点で、ボランティア活動を教育の場に取り入れてきた。この15年間で、学校は男子だけの工業高校から普通科設置・男女共学と大きく変化したが、活動は絶えることなく継続し発展を続けている。

きっかけさえあれば、生徒たちは驚くまでに成長することを実感させられた15年間であった。我々は、生徒のハートに種を蒔くことだけに専念しよう。過去15年間の活動で、生徒たちはそれぞれの活動で自信を持ち、新しい自分を創造してきた。現在も地域の方々の支援もあり、蒔いた種に水と肥料が与えられ大きな花を咲かせ続けている。

以下、平成9年より本校で取り組んできたボランティア活動を紹介する。

1. 車いすのメンテナンス

人とコミュニケーションをとることが得意ではないと思っている生徒たちが始めたのは特別

養護老人ホームで利用されている約100台の車いすを定期的にメンテナンスすることだった。しかし彼らは活動を継続するうちに、いつの間にか自分たちが笑顔で老人と対応している事に気付くことになる。

活動を始めた当初、彼らは高齢者とのふれあいに対し不安を抱いていた。そこで施設の職員にお願いし、整備に必要な車いすを会議室に準備して頂き、そこへ出向いて清掃・整備する事とした。しかし施設の夏祭りやクリスマス会などを通して交流が生まれ、いつしか車いすのタイヤに空気を入れる為に空気入れを持ってお年寄りの集まる空間に出向いていく者が出始める。また、活動を続けるうちに、どの車いすをいつ整備したかという『整備記録』を作成し、車いすを管理する必要性にも気づき活動に学びの要素が生まれる様にもなる。学校外へ出向き活動することで、施設の職員や利用者の家族とも会



特養での修理活動

話する機会が増え、「ありがとう」といった感謝の念を伝えて頂くと同時に、「すごい」「えらい」と感心の言葉を頂戴する。自分の行為が人の役に立っていると肌で感じモチベーションが上がる。

2. おもちゃの病院

子どもたちの目の前で壊れたおもちゃを修理する活動に参加した生徒たちは、おもちゃを通して幅広い年齢層と交流することになった。彼らは学校の外にベクトルが向き、おもちゃの修理を通して環境問題や浪費する日本が見えてきた。

「できる限り子どもの目の前で蓋を開ける」といった目標を持って活動しているが、少し時間のかかる修理の場合は簡単な遊び場を用意して修理が終わるまで遊んでもらうといった工夫も考えた。この活動には女子生徒も多く参加している。修理には余り興味のない女子生徒は入部当初、子どもの遊び相手として活動に参加するが、やがて目の前の子どもが持ってきたおもちゃに興味を抱くようになる〈ヒト→モノ〉。一方子どもよりもおもちゃそのものに関心のある修理担当の男子生徒は、修理後にたくさんの「ありがとう」の笑顔に触れ、持ってきた子どもと会話をするようになる〈モノ→ヒト〉。

『おもちゃの病院』は定期的に学校で開院する傍ら、地域のイベントにも引っ張りだこである。その場で修理できなかったおもちゃは入院という形で一時お預かりし、放課後の活動で修

理し返却している。おもちゃの中には海外で製造されているものも多く、国内で修理用の部品をストックするコストを考えると、メーカーにきた修理依頼には新品との交換で対応していることを知ったり、なぜプラレールの様な商品として息の長いおもちゃが少ないのかを考えたり、故障個所の発見以外にも学ぶことが多い。

やがて生徒たちが親になったとき、「おもちゃ修理ができるお父さん」はきっと幼稚園・保育園でヒーローだろうな…。

3. 高齢者のためのインターネット体験教室

高齢者の方々とマンツーマンでインターネットを体験する講座を開講している生徒たちは、相手がどんな情報を欲し、その際自分にできることは何なのかを真剣に考え、教えるハズの自分が自分たちの知らない世界に触れ逆に学んでいることに驚きをもつ。

開講にあたり、まず彼らがネットで調べた単語は「敬語」。日頃触れ合うことのないお年寄りとの約2時間に及ぶマンツーマンにはとても不安を抱いていた。教室が始まると最先端のパソコンが普段交流することの無い高校生とお年寄りの仲をしっかりと支えている奇妙な光景が始まる。

教室では簡単なインターネットの仕組みを説明した後、実際にインターネットを体験していただく。参加者の中には機械操作に慣れた方も増えてきてはいるが、高齢者のみなさんはマウ



子供の目の前で蓋を開ける



マンツーマンで対応する

スのダブルクリックが結構難しい様である。生徒の中にはマウス操作を代行するだけでなくキーボードも生徒自身の膝の上に置き、入力のお手伝いをする者もあり、とても微笑ましい。

講習後のアンケート回答のほとんどはネットに関するものよりも「話を聞いてくれたお礼」。日頃の生活でいかにお年寄りが自分の話をじっくりと聞いてもらっていないかが判明する事になる。逆に生徒たちは普段の生活で接することの無い「水墨画」や「寺院」「仏像」のサイトを高齢者の解説入りで訪問する事となり、俄か専門家に变身するといった副産物も生まれることにもなった。

初回開講時、応募倍率は8倍を超えたが、現在は定員に満たない場合もでてきている。開講にあたりポスターを作って学校近隣の高齢者施設などに掲示しているが、簡単なパソコンの操作はできる高齢者も増えてきており、ニーズの変化を感じている。今後はフリーソフトを利用した画像処理教室や年賀状作成など生徒とともに考えていきたい。

4. 空飛ぶ車いす

日本で廃棄される車いすを修理・清掃・再生して東南アジアの国々へ贈る活動をしている生徒たちは、近隣の方に声をかけ毎回100名以上参加者を集める「車いすの合同修理会」を開催している。これだけの人が集まるのは、自分たちの活動が地域社会の人々のハートに種を蒔いているからだと知らず知らずのうちに感じ取る。

学校の近隣にある特別養護老人ホームで車いすのメンテナンスを始めて約2年が過ぎた頃、毎年日本では約5万台の車いすが廃棄されていることを知ることとなる。廃棄の理由は様々であるが、大切な人が車いすを使わざるを得なくなった場合「中古ではなく新品を・・・」そんな気持ちから、日本では中古の車いすの行き場が無いのだという事も理解する。そうした母国のすぐ近隣の国では車いすが大卒の初任給よりも

高価な国もある。『MOTTAINAI』という気持ちが自然に生まれる瞬間である。生徒たちは廃棄されることになった車いすを貰い受け、丁寧に清掃・整備し海外に贈る『空飛ぶ車いす』活動に参加するようになった。土曜日は特別養護老人ホームで車いすメンテナンスを行い、平日の放課後は学校で中古の車いすの清掃・整備を行う。さらに年1回、近隣の皆さんにも声をかけ『合同修理会』と銘打って大勢の方々に国際貢献を体験していただいている。

この活動は、本校を始め共に活動する日本全国の工業高校約50校により運営されている。中古の車いすは、全国の工業高校で清掃・整備され、東南アジアを訪れる旅行者やビジネスマンの手により贈呈先の国へ無料で運ばれる。文字通り車いすが『空を飛び』海外で第2の人生を送る。

5. 被災地支援

東日本大震災の際には生徒たちの日頃の活動が役に立つこととなる。被災直後の3月31日、福島県から埼玉県の加須へ避難されている方へ車いすを贈った。大震災により東北の車いすは大打撃を受けることになった。『空飛ぶ車いす』として東南アジアに送る分を一時譲渡し、使用して頂くことになった訳である。

「倉庫に初期不良で販売できない発電機能付ラジオがあるんだが…」そういった相談もあった。ラジオはおもちゃ？ではなかったが、故障箇所を発見し修理する事には違いない。早急に修理し70台を気仙沼の避難所へ送った。修理を担当しない生徒も修理済みラジオを1つ1つ梱包する際、心を込めて書いたメッセージを同封。「遠くにいる自分にできることは無いか」真剣に向き合って行動を起こした。被災直後の避難所の体育館で電池不要のマイラジオは大変喜んでいただいたと思う。

被災地にはH23年冬・H24年夏・H25年夏に訪問。現地の高齢者施設で使用されている車い



宮城県・女川を訪問して

すのメンテナンスを行ってきた。震災後、学校では生徒会が募金活動を行い、生徒と教職員で節電意識を持ち、仮設住居に送る食器類の募集・梱包などを行ってきたが、実際に被災地を訪問し何ができるかといった問いに対し出した『日頃行っていることで貢献できないか』という回答は、文字通り15年前にボランティアを始めた当時の生徒たちが考えに考えた末にたどり着いた世界そのものであった。

6. 自転車発電

前述の活動に日常的にかかわっている生徒は全校生徒の中の1割程度である。しかし、学校の中にそういった意識を持って活動している生徒がいるという事は様々な形で学校全体に影響を与えている。

本校は携帯・スマホの持ち込みは可能である。登校後生徒たちは自分のロッカーに携帯・スマホを保管し下校時まで所持しないルールとなっている。東日本大震災時、各自で通信手段を持っていた事は家庭との連絡などで非常に有効であった。しかし今後想定される東京近辺での地震で電気が止まった時には、約千人の生徒が所持する携帯・スマホの電池が次々と切れていくという事態に直面する。「自分たちの携帯・スマホは自分たちで充電する。」こういった発想で生徒たちは自転車による発電に取り組み始めた。約300台の自転車登校者の自転車が有事に発電機に変身する。こうした発想や取組は環境によるところが大きいと感じる。学校は学びの

空間や創意工夫の場をどうやって創出するかが問われていると思う。

おわりに

いずれの活動も、授業で「ものづくりを学ぶ工業高校生」として、学んだ事を社会に活かす活動の模索の結果誕生したものである。それぞれの活動は生徒会ボランティアとして位置づけられ、それぞれ1名の顧問が担当している。生徒は部活動と同様に募集され、現在は約100名の生徒が活動している。

実は15年間の間で継続するに至らなかった活動もある。ネットの環境を利用して「おもちゃ修理ノウハウ集」を作ろうというものである。全国で同様の活動をされている方々が、それぞれの技をネット上で公開。メーカーなどの情報も交換し合う。そういった場を作ったが長続きはしなかった。「車いす修理ノウハウ集」の作成も同様で、裏ワザ集・100円ショップ活用術などのメニューも用意したが継続することができなかった。

数々の試行錯誤・模索の連続ではあったが、読売教育賞を始めとする数々の高評価を頂くことになった。英語や社会の教科書にも登場し本校のボランティア教育は新聞やテレビでも数多く取り上げられることとなった。

今回ご紹介したすべての活動は『地域密着』がキーワードとなっている。本校の活動は地域社会に支えられてきた。成り立ちから東京の大田区という地域と密接なつながりのある私学ではあるが、地域の中で生徒が育てられている事を実感している。しかし、逆にこれら学校の教育活動が地域社会に刺激を与えていることも確かであろう。

ボランティア活動を教育に取り入れて教職員にも様々な学びがあった。生徒だけでなく大人も「ありがとう」の笑顔で元気になる。『心豊かな技術者を求めて』今後も生徒の心のスイッチを入れられるよう活動していきたい。